

〈修士論文要旨〉

## 畿内地域と伊勢・伊賀地域における 群集墳の展開について

佐 治 健 一\*

### はじめに

古墳時代後期における古墳のあり方を考える上で最も顕著な現象は一定地域に密集して築造される小規模古墳の爆発的な増加である。群集墳の性格については戦後、近藤義郎氏の奴隸主的な「家父長家族の墓」であるという理解と西嶋定生氏の大和政権による身分秩序の拡大のあらわれとの理解を軸に研究が進んだ。

群集墳の分析方法については広瀬和雄氏によって、古墳群の構造を理解する上で、数基の古墳からなる小支群に分解することの有効性が示されている。また群集墳の消長から見た分類については和田晴吾氏による分析がある。

本論文の目的は畿内政権による周辺地域支配の一端を明らかにすることにある。そのため畿内周辺地域にあり、未だ十分な研究がされているとは言えない伊勢・伊賀地域における群集墳の展開過程について、畿内地域との比較検討を行い、その実態を明らかにしていく。

### 1. 畿内地域との比較から見る伊勢・伊賀地域における横穴式石室の型式編年について

近年、横穴式石室の型式編年に関しては従来の須恵器の編年をもとにした分類から尾崎喜左雄氏や富山直人氏のように石材や用石法、またその加工方法に注目した石室そのものの編年が試みられるようになってきている。

本論では(1)平面形態、(2)立面構造、(3)石の積み方、(4)玄室幅指数、(5)羨道幅指数に注目して型式編年を行う。

### 2. 伊勢・伊賀における地域区分について

伊勢・伊賀地域における群集墳の展開過程をとらえていく上で河川の流域および古代の行政区分をもとに以下の6つの小地域に区分を行った。

伊勢地域では北から(1)北勢地域(木曾川・鈴鹿川流域)、(2)北中勢地域(安濃川流域)、(3)南中勢地域(雲出川流域)、(4)南勢地域(櫛田川・宮川・五十鈴川の各流域)。また伊賀地域では(5)北伊賀地域(木津川流域)、(6)南伊賀地域(名張川・宇陀川流域)。

平成20年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

### 3. 伊勢・伊賀両地域における時期別による群集墳の展開について

第2章での横穴式石室の型式編年に須恵器の型式編年を加え以下の8つの時期区分を行い、時期を追って畿内地域と伊勢・伊賀両地域における群集墳の展開について検討していく。

I期：TK23型式期～TK47型式期（5世紀後葉～6世紀初頭）

II期：TK47型式期～MT15型式期（6世紀初頭～6世紀前葉）

III期：MT15型式期～TK10型式期（6世紀前葉～6世紀中葉）

IV期：MT85型式期～TK43型式期（6世紀中葉～6世紀後葉）

V期：TK209型式期（6世紀末葉～7世紀初頭）

VI期：TK209型式期～飛鳥I式期（7世紀初頭～7世紀前葉）

VII期：飛鳥I式期～飛鳥II式期（7世紀前葉～7世紀中葉）

VIII期：飛鳥II式期～飛鳥III式期（7世紀中葉～7世紀後葉）

### 4. 伊勢・伊賀地域における群集墳の構造について

伊勢・伊賀地域における群集墳、11遺跡（北勢地域1、北中勢地域2、南勢地域3、北伊賀地域2、南伊賀地域3）について立地、築造年代の検討から古墳群の構成について検討を行う。

### 5. 畿内地域と伊勢・伊賀地域における群集墳の展開について

畿内における群集墳は築造時期の消長から4つのタイプに分類可能である。

タイプ①（古式群集墳）はI期以降継続して造営されIII期に築造のピークを迎えるもの（石光山古墳群、新沢千塚古墳群など）。

タイプ②（高安型）はIII期に築造が始まりV期に築造のピークを迎えるもの（一須賀古墳群、高安千塚古墳群など）。

タイプ③（平尾山型）はVI期に入って築造のピークを迎えるもの（平尾山千塚古墳群、龍王山古墳群など）。

タイプ④（終末式群集墳）はVII期に入って古墳の築造が始まるもの（雲雀山東尾根B古墳群、旭山古墳群など。前代の古墳が近くに存在する場合でも墓域を新たに設けて築造が始まるものを含む）。

第5章において検討した11の群集墳をはじめ伊勢・伊賀地域における群集墳もこの4タイプの範疇でとらえることが可能である。

### 6. 伊勢・伊賀地域における群集墳の造営者集団について

畿内地域における群集墳では先学による指摘があるとおりの石光山古墳群や新沢千塚古墳群など木棺直葬による埋葬や竪穴式石室を主な埋葬施設に採用する群集墳は在来の倭人勢力によって築

造された可能性が高い。一方、一須賀古墳群や高安千塚古墳群、平尾山千塚古墳群など出現期より横穴式石室を埋葬施設に採用する等質的な円墳で構成される群集墳は渡来系の造営者集団が想定される。

そうした傾向は第5章における検討から、伊勢・伊賀両地域においても同様であると言える。

## 7. まとめ

伊賀地域における群集墳の消長は水系を同じくする大和宇陀地域のそれと近く、例えば久米山古墳群（伊賀市）と宇陀丹切古墳群（奈良県宇陀市）の展開過程には強い類似性が指摘できる。また渡来系の夏身氏の本拠地であったとみられる南伊賀地域の上山古墳群（名張市）では河内の高安千塚古墳群（大阪府八尾市）等と同じく横穴式石室を採用する円墳のみで構成される極めて等質的な構成をなす。

伊勢地域においても同様に昼河古墳群（伊勢市）など一部に東海地方の影響が窺われるものの概して畿内地域の影響を受けた群集墳が極めて多い。

従って、伊賀地域については畿内地域の一部として、畿内地域と同様、乃至は同等に群集墳が展開・波及していくものと考えられる。すなわち、そうした状況は『新撰姓氏録』等の文献が示すように伊賀地域の豪族層が阿倍氏のような畿内の大豪族と擬制的同族関係を結んでいたことの証拠<sup>(1)</sup>となると考えられる。また伊勢地域では東海地域からの影響も考慮する必要があるが、基本的には横穴式石室を紐帯として、畿内地域の大きな影響の下に群集墳が展開していくと考えられるのである。

【註】(1)『新撰姓氏録』によれば伊賀地域の氏族である阿拝朝臣、伊賀朝臣、名張臣、高橋臣（膳臣）らは全て阿倍朝臣と同祖とする「大稲與命之後也」としている。このことは朝廷における阿倍氏と伊賀地域の在地系豪族層が擬制的同族関係を結んでいたことを示すものと考えられる。